

雇用の分野における女性活躍推進に関する検討会（第4回）	資料6
令和6年4月12日	

第3回検討会の議論について

女性活躍と月経、不妊治療、更年期等の課題

<株式会社大和証券グループ本社>

- 生理や更年期による休暇取得が促進されると、アブセンティーズムが増えることとなるのか。
 - ← 企業からは、生理や更年期による不調を病気と本人が考えるかどうかによるもので、アブセンティーズムがダイレクトに増えるということではないと考えているとの説明があった。
- 健康に関する取組を行うにあたって、従業員の意見はどのように吸い上げていくか。
 - ← 企業からは、年に2回、会社に対する要望や意見を聞く自己申告書というもので声を拾っているとの説明があった。

<ロート製薬株式会社>

- 健康に関する取組を行うには、どのようなきっかけがあるか
 - ← 企業からは、
 - ・ 社内のアンケート調査で不定愁訴の回答が多かったことをきっかけに、原因の一つとされている点（鉄分不足）に貧血の検査や補助という形で取り組むこととした
 - ・ 従業員が手上げ参加する形のプロジェクトを様々な形で積極的に実施している等の説明があった。
- 健康に関する取組では、会社として取り組んでほしい層に重点的にアプローチするか、従業員の自主的取組に任せるか。
 - ← 企業からは、
 - ・ 基本的には自主的取組に任せるが、職種や勤務場所にかかわらず全社員が取り組みやすいような工夫をしている（工場内でも使える活動量計を配布する等）
 - ・ 年に数回、社内でイベントを行うことで、普段取り組まない方にも取り組んでいただけるような機会を創出している等の説明があった。

<東京大学大学院医学系研究科 講師 佐々木那津氏>

- 黄体ホルモンの低下が、セロトニンの分泌を低下させるということだが、PMSに加えてうつ症状がある方の場合は、どちらが重い方が多いか。
 - ← 有識者からは、
 - ・ PMSとうつの診断基準上の違いは、PMSは月経前に出る症状である一方、精神科で治療が必要なうつは、（月経前に悪化することはあるが、）月経周期にかかわらず安定して状態が悪いという点。

- ・ 就業においてどちらが仕事の生産性により影響するのかについては肌感覚で違いを感じるのではなく、研究分野でも、これから知見を貯めていくべきところとの説明があった。
- 更年期が終わると黄体ホルモンは少ないと思うが、憑きものがとれたように楽になったという方がいる。これはホルモンバランスが安定することによるのか。
 - ← 有識者からは、更年期はホルモンの変動によって体の適応に負担がかかるので、ホルモン値が安定することで健康状態が維持しやすくなると説明があった。
- 不妊治療経験者による無理解とはどういうものか。
 - ← 有識者からは、治療経験者（育児中の人含む）が、「自分はこうだった」と、治療中の方に対して発言する際、人によって治療の心理的負担は違うことから、受け止め方の違い（無理解と感じる状況）が生まれるのではないかという説明があった。
- 月経痛の痛みの程度を定量的に評価するようなものはあるのか。
 - ← 有識者からは、痛みは主観的でどの程度生活に影響があるのかも個人差がある。仕事を休まなければいけない、休まなくても良いが辛い、等、社会上の支障の程度を目安にするということも有効なのではないか、との説明があった。
- ヘルスリテラシーが生産性に影響するのはなぜか。
 - ← 有識者からは、知識を持つことで、残業しない、運動する等の行動変容が起こり、それによって自身のパフォーマンスが向上するという説明があった。
- 女性従業員からは職場での配慮ニーズが高く、教育ニーズはあまり高くないのはなぜか。
 - ← 有識者からは、教育では、その後に自身の行動変容が必要とされる（セルフケアが求められる）が、当事者はそれよりも、職場での配慮、制度の整備によって、自然と健康づくりができるような環境を求めていると考えられるとの説明があった。

＜総括＞

- 生活やキャリアの在り方が変わっていく中で女性活躍を推進していくために、月経、不妊治療、更年期等の課題を取り上げることは、働く女性自身と企業の双方にとって重要ではないか。
- 月経、不妊治療、更年期等の課題について職場での理解・支援を進めていくためには、症状の出方や期間等に個人差があることを理解することが重要ではないか。
- 月経、不妊治療、更年期等の課題に関しては、個々のヘルスリテラシーを高め、生活改善（運動・睡眠等）によりストレス軽減をすることに加えて、勤務先での働き方の改善や、男性の多い職場における理解や男性上司の理解等も大切。総合的に取組を進めていく必要があるのではないか。